

2020年5月10日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司式者 横山ゆずり

前奏

招詞

ローマの信徒への手紙 第12章1節

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによって
あなたがたに勧めます。

自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして
献げなさい。

これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

讃美歌

讃美歌 21-358 (子羊をばほめたたえよ！)

1番のみ

「子羊をば ほめたたえよ！

妙なる歌声 天に満ちて。

神の民よ、恵みの主に

栄えの冠を ささげ歌わん」

交読

詩編 61篇 (p. 65)

神よ、わたしの叫びを聞き

わたしの祈りに耳を傾けてください。

心が挫けるとき

地の果てからあなたを呼びます。

高くそびえる岩山の上に

わたしを導いてください。
あなたは常にわたしの避けどころ
敵に対する力強い塔となってくださいます。
あなたの幕屋にわたしはとこしえに宿り
あなたの翼を避けどころとして隠れます。

神よ、あなたは必ずわたしの誓願を聞き取り
御名を畏れる人に
継ぐべきものをお与えになります。
王の日々になお日々を加え
その年月を代々に永らえさせてください。
王が神の前にあってとこしえの王座につき
慈しみとまことに守られますように。
わたしは永遠にあなたの御名をほめ歌い
日ごとに満願の献げ物をささげます。

祈 禱 教会の頭である主イエス・キリストの父なる神さま、
あなたの御名をあがめます。

あなたのお守りのうちに一週間を歩んだわたしたちが、今日、この教会で、あるいは家庭において、またそれぞれの場所で礼拝を覚えつつあなたのみ名を崇める者です。人間の予定や予測が成り立たないこと、そして、世界中が新型コロナウイルス感染によって、今なお、多くの不安と混乱に中いることを認めざるを得ません。だからこそ、わたしたちはどのようなところにあっても、この状況に真摯に向き合うこと、いのちを守るために共に働き協力し合うことができま

すよう、お支え下さい。医療の現場で、福祉の現場で、国の
かじ取りを任されている現場で、この社会を支えるためにあ
なたから遣わされたところで労しておられる者の現場で、あ
なたの深い憐れみと顧みが豊かにありますように。あなたが
愛をもってこの世界をお創りになられたこと、そのことを感
謝をもって受けとめ、そしてそのいのちを守るためにわたし
たちの言葉と行動とをお守りください。またわたしたちの成
し得ないことにおいては、幾重にもあなたが支え顧みてくだ
さいますように。

今よりみ言葉に聴きます。わたしたちのこころを整
え、聴く耳を、受けとめる心をお与えください。み言葉の中
にあるいのちに触れ、そこから新しいいのちと恵みとをいた
だくことができますように。この感謝と願いとをわたしたち
の救い主、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。
アーメン

聖書

マルコによる福音書 第12章13～17節

(新約聖書 p. 86)

讃美歌

讃美歌 21-343 (聖霊よ、降りて)

1番のみ

「聖霊よ、降りて むかしのごとく

くすしき御業を 現したまえ。

代々にいます ”霊“なる神よ。

来たりてこの身に 満ちさせたまえ。」

説教

「神さまにお返しする」

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神にかえしなさい」。今朝はこのみ言葉に心を注ぎ、聴いていきたいと願っています。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神にかえしなさい」。言うまでもなく、この言葉は、イエスさまが言われた言葉、問いに対する答えです。ではこの答えに対する問いとは何だったのでしょうか。その問いとは、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」。この問いをイエスさまに投げかけたのは、「ファリサイ派やヘロデ派の人」数人であったとあります。しかも、いきなり本題には入らず、わざわざと言いますか、もったいぶったような、あえて長い挨拶のようなものを述べたうえで、問いを差し出します。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです」。このような言葉をわたしたちはどう評価するのでしょうか。もしかすると、早く本題に入れ

ばいいのに、わざとらしいお世辞に聞こえる、そう考える人も
いるかもしれません。あるいは反対に、イエスさまに質問した
いけれど、いきなりでは失礼かもしれないというような、途方
にくれた思いが現れているようだとして理解する人もいます。
す。

ここで「人々を分け隔てせず」とあります。この言葉の
意味は、人の顔を見ないという意味ですから、周りの顔色を窺
わないという訳でもいいかもしれません。つまり。ここではイ
エスさまに対して、あなたは人の顔色なんかは窺わない、真理
をそのままはっきりと言われる方、神の道を教えて下さる方
で、と言っているようです。

もう一つ、「**神の道**」とあります。わたしたちが自分の人
生の道筋、何を目指して生きるのか、その道筋が分からないと
どうでしょうか。自分の生きたいように、進みたいように歩め
ばいいと思っけていても、自分の進むべき道が全く分からないと
すれば、こんなに不安なことはないだろうと思います。反対
に。自分の進むべき道が決まれば、その道を進むことができる

ようになります。そのように、私たちの人生にはやはり道案内がいるのではないか。もし道が分からなくなれば、そこで確かな道を指し示してもらいたい。当時の人たちは、そのような道を示してくれる教師を求めていたようです。だから、ここでイエスさまに対しても「あなたが真実な方で、・・・真理に基づいて神の道を教えておられるから」、だから、期待を込めて尋ねた。そう理解することができます。ただ事柄は、税金というとても具体的な事柄についての道でした。

そもそもこの問いを誰がどんな理由で出してきたか。マルコはこう記します。「さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした」。イエスさまところにやって来たのは「ファリサイ派とヘロデ派」です。ここは奇妙です。というのも、このふたつのグループはあまり仲がいいわけではありません。どちらかと言えば、ファリサイ派は現実に妥協する生き方ではなく、そのときどきにおいて神の民の不信仰を嘆きながらも、少なくとも自分たちだけは信仰の純潔を守ろうとした人た

ちです。そうであればなおのこと、社会に迎合するよりは、たとえ社会的に不利な立場に追い詰められようとも、それを甘んじて受けることも厭わない人たちでした。ところが、ヘロデ派というのはそれとは反対の、この世において最も現実的な生き方をしていこうとする人たちでした。というのも領主ヘロデの家に近い立場の人たちなのですから、当然ローマの権力に支配されることを受け入れる立場の人たちです。とすれば、本当は対立するはずの人たちが、ここでは一緒になっている。なぜか。互いに利害が一致するような何か目的があったのではないか。この二つのグループを送ったのが、最初に出てくる「さて、人々は。イエスの言葉じりをとらえて陥れようとしてファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした」とあります。つまり、主イエスと向かい合っていた人たち、ユダヤの民の指導者である祭司長たち、律法学者たち、長老たちのことでしょう。彼らはすでに、イエスをとらえて殺そうとした。しかも合法的にしなければいけない。自分たちは表に出るわけにはいかない。どうするか。そこで、罾をしかけます。イ

エスが失敗するような罠を仕掛けます。それが、「ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」という問いでした。

さてここでも不思議なことがあります。イエスさまは明らかに「彼らの下心を見抜いて言われた」とあるからです。しかもそこまで見抜いているのであれば、あなたたちの質問にはなにやら怪しげな、不純なおいがするから、わたしは答えないと言われたのかというと、そうではない。これまでイエスさまは相手から問われたときに、場合によっては敢えて答えないということもありました。ところが、ここではその下心を見抜いておられながら、その下心、表に現れてこないような心の深いところにある問題に対して、ご自身が答えなければいけないとお考えになったようです。そして何をなさったか。「デナリオン銀貨を持って来て見せなさい」と言われます。

彼らがデナリオン銀貨を持ってくるとわざわざ言われます。「だれの肖像と銘か」。これはいったい誰の肖像で、なにが

刻まれているのか、と尋ねられます。その当時使われていたデナリオン銀貨には、表には皇帝ティベリウスの肖像が「ローマ皇帝は神の子である」という言葉と一緒に刻まれ、裏側には、皇帝の母の彫像も刻まれていて、「母なる神」と書いてあり、同じように母なる神を讃える言葉が刻まれていたようです。これがユダヤの人にとってはもっとも辛いことでした。懐から出すお金に、ローマ皇帝の、しかも神の子としての彫像が刻まれていること、それを持たざるを得ないということは、とてもつらいことであったはずで

けれど、イエスさまからこれは誰のものかと尋ねられれば、皇帝のものですと答えるしかない。しかもそこでイエスさまが言われたのは「**皇帝の者は皇帝に返しなさい**」という言葉です。例えば、わたしたちが税金を納めるときにどんな気持ちになるでしょうか。たとえ、社会の役に立つということがわかっているとしても、喜んで納めるかというところではなくて、せっかく自分で稼いで自分のものになっていると思っているものを手放すことに抵抗があるのではないか。しかもあなたが喜んで出

せる分だけ献金しなさいというのではなくて、何パーセントと決めて持って行ってしまふ。どうも自分のものを取られたような気がしてならない。そこでイエスさまは、ここで、皇帝のものを皇帝に返すだけだと考えることはおかしいだろうか、と言われます。それはどういう意味なのでしょう。たとえば、お金に皇帝のしるしがついていても、自分の力で手に入れた富であるならば、皇帝のものとは言えないではないか。そういう理解が成り立つのです。

ここでイエスさまがさらに問うておられるのは、自分で稼いだものは自分のものなのだから人に与えるものか、という生き方の、その根っこにあなたがたの一番大切な問題が隠れていないだろうかということです。そうすると、ここで最も大切なのは、「神のものは神に」という言葉です。

今日の聖書箇所は、たびたび、教会やキリスト者が、国家権力に対してどういう態度をとるべきか、というところで取り上げられることの多い箇所です。確かにここでは「皇帝のものは皇帝に返しなさい」と書かれているけれど、それよりも

っと遥かに大切なことは、「神のものは神に」ということです。これだけは、たとえローマの皇帝であっても、この原則から逃れることはできません。

では、神のものとは何でしょうか。何もイエスさまは言われません。「皇帝のもの」というのは、ここでは具体的に税金のことが取り上げられ、お金のことが話題になったからです。一つの国において、国の経済を預かる皇帝が、国の責任者として税金を納めることを、人々に命令し、自分が発行しているお金のうち、何パーセントかを税金として返してほしい、そういうことを言っている。では、いったい、神さまはここで何を、ご自分のものとされるのだろうか。神さまといえども、やはり税金を求めておられるのだろうか。神さまなのだから、神殿税のことだろうか。いろいろな理解ができるかもしれません。

ただここで忘れてはいけないことがあります。イエスさまはここでローマ皇帝の姿が刻まれた貨幣を見せながら、これは誰のものかと問われ、そして神のものは神に返そうとしておられる。うながしておられる、と言ってもいいかもしれませ

ん。こう理解することができるのではないか。つまり、貨幣にはローマ皇帝の姿が刻まれているように、神の姿が刻まれているものがあるのではないか。それが何か、あなたがたはわかるか。きっと当時の人たちは、ピンときたかもしれません。旧約聖書の一番最初には創世記があります。創世記には、神が、ご自分の姿に似せて人を造ったとあります。そうすると、神の姿が刻まれているものがここにあるのではないか。それは、わたしたち一人一人ではないのか。わたしたちは、みんな神さまの姿を宿している。神の姿が刻まれ、神の言葉が刻まれている。それがわたしたち自身ではないのか。だとすれば、ここで大切なことは、そのわたしたち、神さまのものであるわたしたちを、神さまのお返しすることではないのか。自分という人間は神さまに造られ、命があたえられたものであり自分のものではないということを、わきまえることが求められているのではないか。

そこでさらに改めて知らされることは、神のもの、つまり、神さまがお造りになったものは、私一人ではないというこ

とです。皆が、神に造られたものだということ。世界中の人間がそうだということ。そして、この世界を管理するようにと、神さまはわたしたちに大きな使命を与えられた。そのように現実を捉え直したところ、ではいったい、わたしたちは、何を自分の道とするのかということが見えてくるのではないか。

緊急事態宣言がまだ解かれない状況にある中、今わたしたちは、さまざまなかたちで礼拝を守っています。来たくてもここに来ることができない人たちもいます。けれど、どこにあっても、礼拝を守るときに忘れてはならないのは、礼拝においてわたしたちは神のものを神に返すということを毎週繰り返しているということです。その意味では、日曜日ごとに、自分自身を神さまにお返しするというをしているのだと言えます。そのことを確認するのが礼拝でもあります。そしていずれ、本当に神さまにお返しする時がやってきます。

イエスさまは神のものを返しなさいと言われたとき、ご自身の十字架の道を見据えながら、「ここに道がある」と言われました。やがてこの神の道は、「十字架の道」であることがはっ

きりしてきます。その道で見えてくるわたしたちの生き方は、しがみつき、いろいろなものにがんじがらめになっていることから自由になり、神に仕え、人に仕えることを喜ぶ道です。そのために主がここで何をしてくださったか。神さまから託されている自分自身の姿、歩みを通して恵みを知る一週間でありますようお願いいたします。お祈りいたします。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さま、とても小さな、ささやかなことであっても、道が見えなくなるわたしたちです。イエスさまが多くの敵意の中にありましても、愛することを貫かれたように、そして主の恵みを味わい知った多くの人たちがあなたの恵みに生かされて進むべき道を見出したように、わたしたちもまた、つまずきを繰り返しながらも、あなたから示された道を歩むことができますように。そして、互いにその道を歩むために助け合うことができるよう力をお与えください。とりわけ、医療の現場で、福祉や介護の現場で、またこの社会を維持するために労しておられる多くの

方々の現場で、国のかじ取りをする者の現場で、また見える所で、見えない所で闘っておられる方々を覚えます。どうかあなたが守り導いてくださいますように。悩みと不安の中にあるわたしたち、この世界をどうか憐れんで下さり、あなたこそが、すでにわたしたちのために勝利してくださるという確信を失うことはありませんよう、導いてください。主のみ名によって祈ります。 アーメン

讃美歌 讃美歌 21-516 (主の招く声が)

1 番のみ

「主の招く声が 聞こえてくる
日ごとにやしない、新しく生かす、
私たちを 招く声が。」

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱

平和のうちに、この世へと出て行きなさい。

主なる神に仕え、隣人を愛し、

主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。

主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と

聖霊との親しき交わりとが、

あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>